

副左胃動脈から分岐する 気管支動脈が認められた1例

田中 治¹ 石原 潔¹ 中川 登² 西村恒彦³

¹公立山城病院放射線科 ²同病院外科

³京都府立医科大学放射線科

近年、肺癌に対する抗癌剤動注化学療法や喀血に対する気管支動脈塞栓術が広く行われるようになり、気管支動脈の解剖学的変異を把握することの重要度が増している。今回、われわれは非常に稀と思われる気管支動脈の解剖学的変異を有する1症例を経験したので、多少の文献的考察をふまえ報告する。症例は74歳、男性。胆管細胞癌に対する術前マッピング目的で腹部血管造影が施行された。腹腔動脈造影および総肝動脈造影にて、左肝動脈から分岐する副左胃動脈の存在が認められた。さらに副左胃動脈から分岐し、上行する動脈がみられた。この動脈の栄養臓器を同定する目的で、副左胃動脈にマイクロカテーテルを選択的に留置しCT-angiographyを施行したところ、食道壁と左主気管支に造影効果が認められた。

皮静脈の解剖と役割

今西宣晶¹ 中嶋英雄^{1,2} 相磯貞和¹

¹慶應義塾大学医学部解剖学 ²同大学形成外科

解剖学においては、静脈解剖は未解明の領域であり、従ってその命名に関しても非常にあいまいなところがある。皮静脈は浅静脈とも呼ばれ皮下組織にある静脈の総称であり、通常教科書によく描かれている皮下の静脈網のことを指しており、動脈は伴行していないとされている。しかし、これまでの我々の研究から、実際には橈側、尺側皮静脈や大、小伏在静脈には平行して動脈が走行していたり、また皮下組織には筋膜を貫いた皮膚穿通枝（動脈）の伴行静脈が存在している。このように、詳細な解剖が解明されるにつれ、これまでの概念や名称が通用しなくなっている。

今回我々は全身皮膚皮下組織の静脈をX線学的に観察し、皮静脈の再定義および皮静脈と伴行静脈の相互関係など検討したので報告する。動脈と伴行する静脈系と伴行し

ない静脈系の相互関係は皮膚のみならず他臓器についても興味あるところである。

皮静脈網は基本的には静脈のバイパス経路ではなく、皮膚（真皮）を循環した血液の環流経路である。この皮静脈系が伴行静脈系と交通あるいは合流することにより、深部および中枢へ血液が流れていく。この交通および合流は皮下の様々な部位でみられ、また深筋膜下でもみられる。また、静脈系には弁が存在しそれが血液の流れの方向性をある程度決めている。

この皮静脈系の解剖を考慮することで、手術操作による皮膚の壊死を避ける適切なデザインや工夫を考えることができる。と考える。

皮下結合組織の肉眼構造と組織学的構造

今西宣晶¹ 中嶋英雄^{1,2} 相磯貞和¹

¹慶應義塾大学医学部解剖学 ²同大学形成外科

皮下組織は組織学的には脂肪組織と疎性結合組織（膠原線維や弾性線維など）で構成されているが、肉眼的には脂肪組織は粒状の脂肪小葉として観察され、また疎生結合組織はその小葉を取り囲む膜状の線維組織すなわち筋膜として観察される。この脂肪小葉の形態および筋膜の厚さは多様性に富んでいるが、基本的には皮下組織はこれら脂肪と筋膜により2層を形成している。今回、皮下組織の組織切片でみえる浅層と深層の脂肪組織、線維組織、血管が、肉眼的には実際にどのような構造をしているのか解明し、組織像と肉眼像を一致させることを目的とした。組織切片の断面像だけでは皮下の浅層も深層も同じように見え、その区別をすることは不可能だが、実際には皮下組織は形態の異なる脂肪小葉、筋膜、血管で構成されている。浅層は脂肪小葉が比較的立方状で、厚い筋膜で区分けされている。小葉間に比較的太い血管が走行し、小葉はそこからの枝を受けている。深層は脂肪小葉が扁平で細長く、疎な筋膜で囲まれている。小葉間に比較的太い血管が走行するが、そこからの枝が疎な筋膜内で密な血管網を形成している。組織学的所見と肉眼像が一致することは重要であると考える。